

# 「道徳科指導法」 ③ 基礎基本

～自分で考えて行う道徳授業のポイント～

初級編

後藤 忠 2023.08.20

## 1 「教材選択」の基礎基本

教材は児童の心を映し出す鏡であり、生き方の糧となるものでなければならない。

- (1) よい教材を選ぶ。
- (2) よい教材とは、「ねらいに合っている」、「分かりやすい」、「興味関心がもてる」、「臨場感がある」教材のことを言う。  
教師の心に響き、教師が惚れた教材は間違いなくよい教材と言える。
- (3) よい教材には、ねらいとする道徳的価値の理解（価値理解、人間理解、他者理解）を深めるエキスがたっぷりと詰まっている。
- (4) よい教材は教師の目と心と足で探す。

## 2 「教材提示」の基礎基本

教材提示が雑だとよい教材も児童の心に届かない。教材提示は、やり直しが利かない1回きりの真剣勝負である。「教材提示に命を懸ける！」

- (1) 児童の心に届く教材提示を行う。
- (2) 教材提示は「間」が大切である。

## 3 （「展開前段」の）「発問」の基礎基本

- (1) 発問は児童の考えを深める重要な鍵（きっかけ）となる。
- (2) 一人の登場人物(A)を追うと「ねらいとする道徳的価値」の理解は深まる。  
選ぶ人物(A)は、迷い、悩み、失敗し、後悔し、奮起する人間くさい登場人物を選ぶ。
- (3) 主な発問（主発問）は3つを基本とする。（中心発問1つ、基本発問2つ）
- (4) 発問構成には「教材分析」が不可欠である。（場面分析と内面分析）

＜場面分析＞ シャープな発問を作るためには不可欠！

登場人物(A)の内面（気持ち、思い、考えなど）が微妙に変化する（動く）ところで、教材文を細かく区切って（分けて）いく。（児童にとってピンポイントの発問は考えやすく、話し合いもよく噛み合う。）

＜内面分析＞ 児童理解。板書計画のためには不可欠！

- ① 各場面のAの内面を多面的、多角的に分析し、すべて書き出す。
  - ② Aの内面が「本時のねらい」に最も迫る場面（中心発問場面）を一つ決める。
- ※ 一般に道徳の「本時のねらい」は抽象的で分かりにくい。  
「本時のねらい」を教材の登場人物に合わせて翻訳すると中心発問場面が具体的に見えてくる。

例：はしの上のおおかみ（1年） B〔親切、思いやり〕

<本時のねらい> 身近にいる人に温かい気持ちで接し、親切にしようとする気持ちを育てる。

↓

《翻訳》(おおかみが) 小動物たちに意地悪をするより、温かい気持ちでやさしくする方がずっといい気持ちだ、これからは親切にしようと思う気持ち …。

- ③ 中心発問を生かすために必要な場面(基本発問場面)を残りの場面の中から2つ選ぶ。  
④ 上記3場面分析したAの内面が児童からすべて引き出せる発問の問い方を工夫する。

①発問場面をピンポイントで押さえ → ②分かりやすい言葉で問う。

発問は教材の「行間」を問う。(教材に書いてあることは問わない。)

#### 望ましくない発問

- ◇ 発問の意図がよく分からない発問
- ◇ 本時のねらいや指導内容に沿っていない発問
- ◇ 言葉の意味や概念を問う発問
- ◇ どの、何を問われているのか分からない発問
- ◇ 発達の段階や個人差を考えていない発問
- ◇ 言葉がよく吟味されていない(意味が分からない、考えにくい)発問
- ◇ 補助発問が用意されていない

#### 安易に使わない方がよい発問

- ◇ 「なぜ? どうして?」など、理由を問う発問(児童の思考を答え探しに導きやすい)
- ◇ 「もし、あなたが〇〇だったら…」という発問(教材を使って自己を見つめる道徳学習の特質を損ねやすい)

## 4 「話し合い活動」の基礎基本

- (1) 「話し合い活動」は「聴き合い活動」である。
- (2) 日頃から聴き方の指導を徹底する。(話は目と耳と心で聴く。話し上手より聴き上手になる!)
- (3) それぞれの学習活動にふさわしい座席に常に変化させる。
- ◇ みんなで話し合うときはコの字形。(顔が見える、板書が見える)
  - ◇ グループで話し合うときはT字形。(対面より圧迫感がない)
- ※ その他、「教材提示のとき」、「自己を見つめる学習のとき」、「書く活動のとき」など、それぞれの学習の目的に合った座席にする。
- (4) 話し合い活動を通して、児童は、
- ◇ 自分の考えの曖昧さに気付く
  - ◇ 自分の考えがはっきりする
  - ◇ 自分の考えと他の人の考えの違いが分かる
  - ◇ 自分の考えが強まる
  - ◇ 自分の考えが変化する← (これはめったに起きない。だから期待しない)

- (5) 一人一人の児童が自分の考えをもって話し合い活動に参加できるように配慮する。
  - ☆ 一人一人が自分の考えをもつまでの時間を確保する。
  - (まだ考え中に話し合いが始まると授業についていけない児童が出てくる。特に、第 1 発問の話し合い開始のタイミングが重要)
  - ☆ 挙手した児童をすぐ指名するのは NG!
  - ☆ 第 1 発問の第 1 発言者を誰にするか予め決めておく。(意図的指名)
- (6) 「話し手は聴き手の方を向いて話す」、「聴き手は話し手を見て聴く」を徹底する。
- (7) 教師の立ち位置に留意する。(常に話し手の対角に移動し、児童の声を傾聴する)

## 5 「書く活動」の基礎基本

児童の思考は話し合うことによって広がり、書くことによって深まる。

- (1) 書く活動は(原則)1 授業に 1 度だけ。(書く活動は時間がかかる)
- (2) 書く時間は、最短でも 5 分は必要。(8 分あると理想的)
- (3) ワークシートの大きさは、書くことに困り感をもつ児童に合わせる。(できるだけ小さ目がよい)

## 6 「板書」の基礎基本

板書は、学習指導過程に沿って児童の発言を分類整理し、ねらいに迫るように構造的にまとめ上げていくものである。(児童の発言を単に右から左へ書くだけの板書は板書ではない)

- (1) キーワードで板書する。(文章だと黒板が雑然となり、分かりにくい。)
- (2) 板書計画を立てる際には、上記 3 「発問」の基礎基本 (4) <内面分析> を活用する。

☆ 板書はすでに授業前に完成されているものと言える。

## 7 道徳科授業に臨む「教師の姿勢」の基礎基本

- (1) 教師も人間として発展途上中。児童とともに自らも高まろうとする気持ちで授業に臨む。
- (2) 児童の発言を受容的に、共感的に、肯定的に、待つ、聴く、受け止める。
- (3) 児童とともに考える。
- (4) 児童の考えを整理する。(板書などで)
- (5) 児童の考えを広げる。
- (6) 児童の考えを深める。
- (7) 児童の学習を支援する。
- (8) 児童に学ぶ。

※ 本資料は、主に「展開の前段」でのポイントを中心に述べた。

その他、「主題名の付け方」、「『本時のねらい』の立て方」、「主題設定の理由の書き方」、「導入でのポイント」、「展開の後段でのポイント」、「終末でのポイント」、「指導上の留意点に書く内容」、「評価」などについては、

A 道徳科学習指導案作成 超 × 3 入門

に詳しく載せているので、是非参考にさせていただきたい。  
いずれにしても、

## 最重要課題

### 「主題」を徹底的に意識して授業を作ること！

道徳科の**主題**は「ねらいとする道徳的価値(内容項目)」と、それを達成するための「**教材**」によって構成される。

その主題を子供にも分かるように端的に表したのが**主題名**である。

「ねらいとする道徳的価値(内容項目)」は、それ自体抽象的で漠然としている。

それを**具体的に**するのが**教材**である。つまり、教材によって具体的な指導内容や指導の方向が決まる。

例えば、小学校中学年の「泣いた赤おに」と「絵はがきと切手」は共に B〔友情、信頼〕の教材であるが、それぞれの主題は全く異なる。前者は「大切な友達」についての教材であり、後者は「友達を信じる」についての教材である。

道徳科の授業では、この「**主題**」を意識することが極めて重要である。

「本時のねらい」はもとより、「主題設定の理由」、「導入」、「展開の前段」、「展開の後段」、「終末」、「評価」のすべてにわたって一貫して「本時の主題」から外れないよう留意して学習指導案を作成し、授業に臨むことが大切である。

すると、終始一貫した**ぶれない道徳授業**になる。